

の剛毛列が全然認められない。宿主は不明（自由生活中採集）。恐らく新種と考えられる。

日本産淡水紐虫に就いて 鈴木 實（埼大・文理・生物）

昨年の秋、浦和市附近の水田で淡水紐虫を発見し以来今日迄約200個體を採集飼育し生態観察を爲すと共にそれらを材料として従来扱われていた淡水紐虫の分類上の標徴を検討し併せて種の同定を行つた。分類上の標徴としては體長、頭端器、頭溝孔、横溝、感覺毛、主針長、臺座長、主針長、副針長、副針數、カルシウム體、吻鞘長等が適當と思われる。上記標徴で既知日本産種を吟味した結果は下記の如くである。故池田岩治博士により記載された廣島の *P. grande* (Ikeda) 1913 は *P. lumbricoideum* Dugés 1830 とすべきである。石塚氏 ('33) により札幌から記録された種に就ては Wijnhoff ('38) は始め *P. hokkaidoense* と命名し後 *P. lumbricoideum* の synonym としたが今回私が同地産の材料を検した結果は寧ろ *P. lacstre* (du Plessis) 1898 と同一種と思われた。私の扱つた浦和産の種は一、二の相違點も認められたがまず *P. gracense* (Böhmg) 1892 と同定される。尙該種を本夏三重縣菅島の水田で採集したから日本に於ても廣く分布しているのではないかと思われる。

北海道中央高地に産するミスダニの一種 *Piona carnea* Koch yar. 今村泰二（北海道學藝大・旭川）

このミスダニは全歐、シベリア、中央アジア、極東、北米及びカナダ等に極めて分布の廣い種類であるがその數は多くない。1936 年内田亨によつて千島より *P. carnea* が、樺太より *P. carnea* var. が各々報告されているが日本からはまだ報告がない。演者は 1948 年に大雪山沼の平より、1950 年に天鹽岳中腹浮島ヶ原の沼より各々この種類を採集飼育した。成體は大きく體長約 2 mm あり長橢圓形で體色はべつ甲色である。産卵は7月で水草の葉の表面に行う。産卵後 10—12日で larva が孵化する。larva は體色黄褐色で主として水底を這つている。larva の寄生は不明なるもトビゲラの成體腹部であるらしい。nymph は成體よりも球形に近い橢圓形で體色は成體に近い。性域板は橢圓形で2體の性感鉢を有する。

淡水産苔虫類の外皮 島海 衷（東北大・理・生）

ヒアリネラ屬はハネコケムシ屬に最も近くその特徴は外皮が透明で角質でなく厚いことである。日本産苔虫の各種の外皮變異を 1. ancestrula と新生部との差 2. 同一虫室内での差 3. 同一枝内での差 4. 季節差 5. 同一季節の年次の差 6. 地方差 により観察した。

以上より見ると變異は環境により生ずるものらしい。之等を飼育観察した結果は各種の外皮は環境によつて著しく變化する。ハネコケムシ屬の外皮は環境によつてはヒアリネラ屬の特徴をとる。タヒチ産のヒアリネラ、グアイヒリアエは明かにハネコケムシでありこの點からもヒアリネラ屬を存在させる事は疑問となる。

チゴケムシに就いて 馬渡静夫（資源研）

チゴケムシは沿岸に最も普通に産するのみならず、船底、眞珠養殖籠等を汚損して相當の害を與える。本種は従来 *Schizoporella oenochros* Ortmann 1890 として廣く知られて居たが、近年濠洲、南米の標本を調査し、且つ同定の基準となつた柳氏の原稿を検した結果、本種の學名は *Watersipora cucullata* (Busk) 1854 とすべきである事が明かとなつた。なお歐洲産原種に比して、口蓋の太いに異なることにより、新變種 var. *watersi* n. var. を提唱する。

本種は viviparous で、完成された幼虫は、母虫體の退化消失後に泳出す。初室は普通虫室と同型で寧ろ大きく、前方に三室を芽出する式即ち simultaneous periancestrular development を行い、その繁殖期 5—11 月に 3—4 世代を繰返すことが明かになつた。